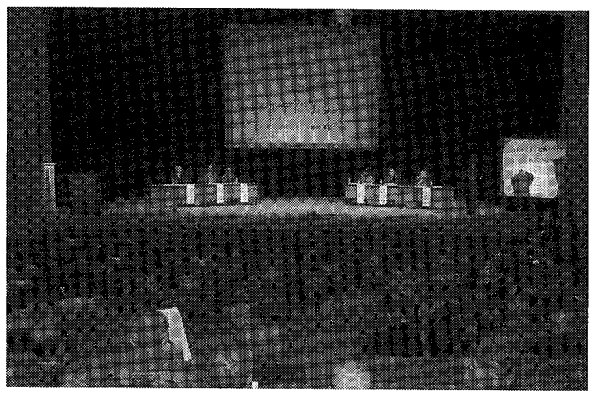
ふれあいのひろば

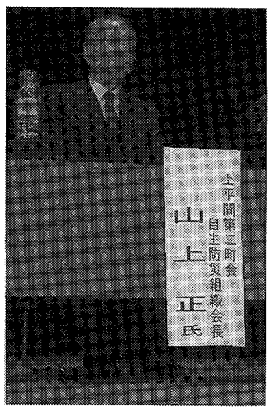
かわら版

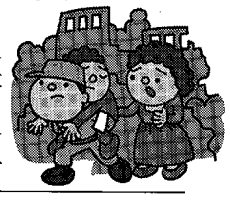
平成20年4月1日発行
上平間第二町会
編集責任者
堤　秀夫
印刷所　長谷川印刷㈲

防災シンポジウム
災害時要援護者を地域で守るために
パネリストに山上町会長



壇上左端、山上会長





川崎市、川崎市自主防災組織連絡協議会主催で1月17日に市長出席のもと約600人が参加してエポック中原で開かれました。市によるパネリストの紹介が要領よく纏められてますので転載いたします。

・上平間第二町会自主防災組織

上平間第二町会は「災害救助ネットワーク」と名付けた隣組単位の小規模防災組織を20地区に区分けし、更に10世帯から15世帯を単位とした組を92組編成して、末端構成員による防災活動を展開しています。

隣組単位を結成してもらうため、モデル地区の指定を行ない各区と各組にそれぞれ防災リーダーを委嘱して、指定区域内の住民参加による集会を開き、名簿作りやいざという時の申合せをして住民同士の面識を持たせる工夫をしています。

更に高齢社会部を組織して高齢者世帯等への見守り訪問を実施しているほか、防災意識調査を独自に実施するなど、全地区への防災リーダー育成も進めています。

・神奈川新聞　1月18日朝刊

中原区で防災シンポが開かれ市内の自主防災組織のメンバー6人が参加、中原区の上平間第二町会の山上正会長は「町会を10～15世帯ごとに細かくグループ分けし、日々の情報交換や高齢者世帯の把握などに努めている」と述べた。

以上が川崎市及び新聞の論評ですが、山上会長は意見陳述の最後に、地域住民を災害から守ることは私達に課せられた責務であるが、私達の災害救助ネットワークも規模も内容も道半ばであり、地域に沢山の防災リーダーを作りながら、内容の深化浸透を図り減災の運動を継続していきたい、と決意を述べ陳述を締めくりました。

小さな歴史
平間の自動車ポンプについて
上平間第二町会顧問　長谷川英吉

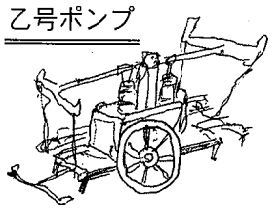
明治32年頃、平間に頻々と火事が起こり、毎晩の様に放火があって村人は恐々たる有様でした。加藤家の火事は建物が大きく、対岸の下丸子より渡舟で渡り応援消火をしてくれました。下丸子のポンプは乙号と同じでピストンが二つあり、四、五人宛向合って交互に押すと連続筒先から20米近く放水できてホースも30米位ありました。勿論、筒先は方向自由で優秀な消火力を誇りました。

捕まえてみれば吾が子なり…村人が疲れた中を見張りをし、ついに犯人を捕えたら破れ小屋に住む50才位の天涯孤独の独り者で、何んと火事場に出される酒を飲みたい一心の犯行だった。捕えてみれば吾が子なり、村中で協議した結果、職を与えて酒を買える様にと昼間は村番、乞食の番、夜は火の番をさせたらピタリと放火は無くなりました。

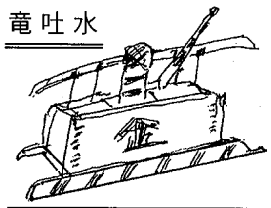
明治27年2月、消防組規則が公布され、御幸村に御幸消防組が設置されたと記録されてますがこの組織は判りません。中丸子に出来た乙号ポンプが明治35年とありますので上平間は更に2年前に出来た事は確実です。

大正13年7月1日、川崎町大師町、御幸村が合併し、川崎市が誕生した際、三消防組が設置され、消防総組頭は石井市長

乙号ポンプ



竜吐水



川崎消防組　中野與右ェ門
大師消防組　桜井長吉
御幸消防組　矢島七蔵
の各氏で御幸組の組織は、
第一部　上平間
第二部　中丸子
第三部　小向
第四部　南河原
第五部　下沼部
第六部　下平間
第七部　戸手・神明
第八部　塚越・古川
第九部　古市場

東京側と分かれおくれた上平間は一番印で半纏にそめて立派なものでした。各部の責任者は、小頭と云って纏、筒先、梯子、鳶口、道具持、提灯、無印と階級があって、総数は20名前後の編成です。

当時は一人前になって消防団員になる事は大変な名誉な事で年数と努力で昇進し纏持から小頭になれば村の有力者になります。この小頭は家柄、財産、総領息子と条件があり、中々なれない。

春秋二回、点検と称する行事があって私共子供達の最大関心事でありました。

春は上平間で行われ八幡宮前から旧加藤スタンド交差点ガス橋道に沿って平間用水が流れていたので横並びに九部のポンプが一斉に放水をした。

秋は河原団地（旧東京製鋼跡地）の西側、大師用水の支流で勿論横並びでラッパの声で一斉に放水競争になる。

一部平間、二部中丸子、三部小向と九部の放水は見事なものだった。私共子供達は吾が村のポンプに声をからして応援した。

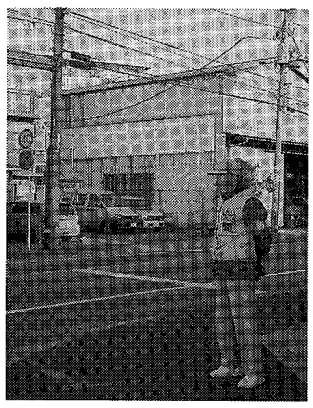
町会活動推進検討委員会
常設プロジェクトチーム

町会では課題の解決と活動推進にあたり、マンネリに陥る弊害を防ぎ、地域住民のニーズを的確に捉える積極策の検討を開始しました。委員会のメンバーは町会運営に責任を持つ専門部全部長と会計、委員長には山上町会長が就任いたしました。

この委員会は担当事業に係らず全体を考えた議論を行います。

児童生徒通学路
安心安全見守り活動

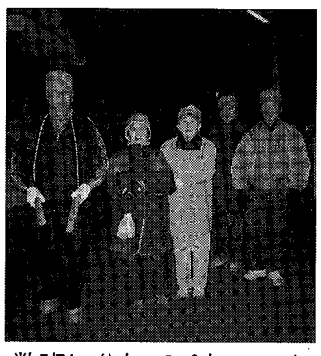
第二町会の区域には、平間小、玉川小、下河原小と3小学校が存在します。子供達を襲う犯罪はテロ行為と同じで全く予測が出来ません。地域の皆様で常時子供を見守る活動が行なわれております。



防犯パトロール（防火防犯部）
夜間・昼間・警察官と合同

歳末警戒は12月29日及び30日の夜10時から12時迄町会全域をパトロールしました。参加者は役員、理事で40人でした。なお、町会では毎月昼夜のパトロールを実施してます。

夜更けてのパトロール
慰労に豚汁を用意



数班に分れてパトロール
理事３人も含む

ミニデイサービス
ひらまの里と共催

毎月1回、とても楽しく大勢の人が参加しております。

平間中学校
朝のあいさつ運動

平間中学裏門にて　教頭先生と

2月21日、1・2・3月生まれの誕生会
後列・左から宇佐美、茂木、日渡、大森
前列・左から小松、尾形、大沼、斉藤、小島の皆さん

こども凧揚げ大会
1月14日 130人参加

青空が時々顔を出す天気の中、多摩川青少年広場に親子の歓声が響きました。参加者にお汁粉のサービスもありました。

お汁粉に舌づつみをうつ子供達

凧揚げに入念な準備の親子

健康体操の会
（ゆりの会）

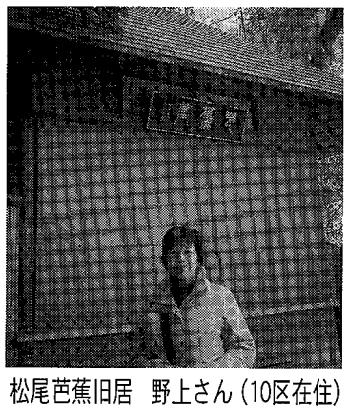
健康体操で心地良い汗を流し、そして町内の防犯パトロールや老人ホームの慰問等、多彩な活動を行なっております。

健康体操は町会会館で月に4回実施しています。

歴史探訪の会
藤村、八雲等の旧跡探訪

2月13日良く晴れた北風の強い日でしたが、東京の早稲田、雑司が谷周辺の歴史探訪会が催行されました。夏目漱石始め島崎藤村、坪内逍遥、永井荷風、小泉八雲、松尾芭蕉の住んでいた旧居跡等を散策しました。

専門家の野口始男先生の解説で楽しい一日を過ごしました。



松尾芭蕉旧居　野上さん（10区在住）

小泉八雲旧居にて　中央、講師　野口氏

＝イタリア紀行＝ヴェネチアを旅して

サンマルコ広場にて
小島添乗員と

H19・11・20㈫旅風会の一行はミラノを14時20分発の専用バスでヴェネチアへ向けて出発、天候は曇ってはいましたが旅行日和でした。

途中、バスの車中ではヴェネチアについて、ガイドさんの説明を聞きながら、順調にヴェネチア本島の入口に到着しました。その時にはもうあたりは夕暮れで暗くなっていました。

そこから水上バスに乗って大運河を進航、運河の両側には丸い屋根の教会が数多く見られ、夕暮れの景色を楽しみました。島内には150もの教会が存立するそうです。20分程してホテル正面の本島船着場へ到着、ホテルの建物は17世紀頃に建てられたもので改装して使用していました。

翌日11・21㈬は、朝8時30分ホテルを徒歩で出発、ホテル前の運河はラグーナと呼ばれ、その川岸を散策しながら、途中でガイドのアントニオさんと合流し、島内の観光に向かいました。

右手に有名な溜め息橋を眺めながら、ハトが主役のサンマルコ広場に着きました。広場の正面にサンマルコ寺院があり、大鐘楼や時計塔、行政館、ドウカーレ宮など、主要なスポットは、訪れる観光客を感動させました。サンマルコ寺院の内部にあった祭壇の衝立は宝石がちりばめてあり、80カラットのダイヤ、エメラルド等、目を見張るばかりでした。ドウカーレ宮では天井画や壁画をはじめ、美しい装飾を見ることが出来ました。ガイドのアントニオさんの説明は、日本語が流暢で、また、時にはユーモアを交えた大変愉快な案内で、今でも印象に残っています。

次に、ヴェネチアグラスの工房を見学し、優れた技術によって作られたカラフルで美しいガラス製品を鑑賞させてもらいました。

いよいよ最後は、水の都ヴェネチア最大の魅力・ゴンドラに乗って水路めぐりに挑戦です。世界遺産の街ヴェネチアは、島と島を橋で結び、大小の運河が迷路のように入り組んで、まさに、水の都としての風情を呈しています。その水路をゴンドリエーレが優雅に操船、素敵なロマンを提供してくれました。約40分の遊覧もあっという間に終わり楽しいひと時でした。楽しかったヴェネチア観光もこれで終わり、一旦ホテルに戻り、14時45分発の水上バスでホテル前を出発、ヴェネチア本島にお別れをしながら、次の観光地フィレンツェへと向かいました。

12区　高野　忠雄

★思い出のコーナー　高射砲敵機に届かず

10区　杉村　亀作

マリアナ諸島のテニアン島がアメリカ軍の手に落ち、ここに米軍の飛行場が出来てから、日本本土に対する空襲は連日、連夜に及んでいた。

私は昭和16年に現役兵として静岡県浜松市にあった浜松高射砲第一連隊に入隊した。甲種合格であった。ここで3ヶ月間の検閲を受けたのち、東京江戸川区にあった高射砲連隊に配属になり大隊本部付きになった。浜松では毎日の様にビンタをくらい、顔が腫れあがっていたが、大隊本部付きになると様子が一変して穏やかな日常になっていた。なにしろ大隊長は陸軍中佐で陸軍士官学校出身の人格者だった。この中佐の乗用車の運転手を仰せつかったため、上官も皆んな親切にしてくれた。大隊には中隊が2隊あり、中隊長は中尉だった。

大隊長の車は四角の赤い佐官旗を閃かせていたので通りすがりの兵隊は、一斉に立ち止まって敬礼する。まるで自分が敬礼された様な錯角をおこして良い気分の毎日だった。

2年で上等兵になり下士官候補生になったので運転手は交替になって伍長に任官した。

その後、千葉県の戦車学校に入ったり高射砲学校に入ったりしたが、やがて茨城県の日立製作所の警護任務についた。敵機B29の空襲から日立製作所を護るためで、砲は4門あった。

私は観測班になり敵機の高度、速さ、方向を観測して発射班に伝達する仕事に携わった。高射砲の弾は直径が7㎝のものが主で10㎝のものもあった。この弾を1発づつ手で詰めて撃つ。発射音が大きく響き、砲身も振動する。演習は平塚海岸で飛行機に吹流しをつけて、これを目掛けて撃った。B29は高度1万メートルで飛来する。高射砲は高さ7千メートルしか届かない。3千メートルの差があれば、下でいくら爆発しても全く無駄というものである。さりとてグラマンの様な戦闘機が低空で来ても、あっという間に飛び去って射撃どころではない。終いには弾が無駄だから撃つなという命令が出た。

私は同期に入隊した者のほとんどが外地に派遣されて戦没した中で内地に残されて、とても悔しい思いをしたものだが、今になれば、こうして生き残った幸運に恵まれたことになる。

終戦後2ヶ月後に復員して、故郷、静岡県榛原群菅山村の家に帰った。父母、兄弟はじめ一家8人が全員無事であった。

昭和27年に川崎に出てきて川崎市役所交通課に勤めることになり、以来、定年迄無事に勤めあげることになった。

ちなみに、私は大正9年7月28日生まれで88才である。

短歌

熱きエール

若者は父となる日を告げゆけり
その背に熱きエール送らむ
両の手は油にまみれ黒ずみて
居れど父なる顔に近づく
学終えて数多の試練越え来たる
生活（くらし）に幸の多かれと祈る
高山　房子

朝焼けの歩道橋から見降ろせば
半生住むも未知の町かな
バス通る街に歌詠む女のいて
珈琲の香の懐しきかな
一輪車乗りゆく少女の髪靡き
踊る両手や一瞬の夢
松森　礼子

俳句　天神台句会

熟年の夢おぼろげに老いにけり
春月や宿着に香る湯気の花
湖の旅立つ白鳥飛礫（つぶて）波
青木　源司

雪予報夜半（よなか）に雨戸そっと開け
春光や医師の一言気力湧く
忘れまい日本の歴史建国記
荒井　スミ

節分や鬼も戻りて福笑い
塩ラッキョウ鳥取砂丘をぐさと刺す
贈られしチャンチャンコ似合う歳となる
梅田　松男

繭（まゆ）玉や母の想いの揺れており
さりげなき今の一言春寒し
用水の未だ目覚めず猫柳
川部　露子

春隣り仏心と夏の虫
初午や初めてのおつかい豆腐やさん
床あげすほこりみつめるひなたぼこ
斉藤　正子

蒼天下小公園の薄氷
金太郎飴割って口にし春を待つ
雪達磨あるのは立入禁止地区
佐藤　輝之

一藝を極めし友のおどり初め
冬のばら町のパン屋の窓飾る
若者に言ひ過ぎたかも冬隣
四津田冨美子

寒強し針で指さす痛さかな
ビル一つ燃え居るような冬茜
木枯しや重き病と伝え聞く
高山　房子

茶道具を見るだけとなる今の身は
よき師よき友つつがなくあれ
初雪にようやく冬の実感を
思わず庭で手ですくい見る
留守い番玄関常に気になりぬ
だれのくつ音一番先か
T・S女87才

多摩川の四季＝春

眼に追えば空にかすかな点となる
揚げ雲雀の声川辺に聞けり
難波船

世界一最高峰のエベレストへ
初登頂の猛（もさ）者も黄泉路へ
咲き盛る湯河原パークの梅の花
かんばしき香のただよい来るがに
H生

節分の明けて雀の宴かな
大寒に背負われし子の寝息かな
深雪晴街ふところに浮かぶ富士
滝口　園美

せきれいの番いのはずむ多摩河原
紅梅は子の記念樹よ年古りぬ
雪降りやサッカーをする男の子をり
堤　秀夫

紅白の餅玉焦がすどんと焼
寒中見舞悔やみ一言書き添へて
豆撒くや犬喜こびて拾ひ食む
長谷川照世

雛出すや豆粒ほどの椀の落ち
チビに巻く我が襟巻やもどらぬな
高層の裾の鳥居の寒雀
松森　礼子

色づきて鶸（ひわ）招きおり花千両
初雪や児の声嬉嬉（ききき）と弾む露地
木枯しを児と受けて立つ通学路
茂木　久夫

立春といふには遠き梅見月
坪庭の梅一輪が香を運ぶ
手をつなぎ何語ろうや寒椿
山上　正

光源氏のモデル　藤原道長の自筆日記

紫式部が書いた源氏物語、光源氏のモデルは、専門家の考察から藤原道長であろうことは疑いないと言われている。紫式部や清少納言の宮仕えした時代の最大権力者である。

道長は遠祖、藤原鎌足以来、藤原氏の嫡流で、摂政や関白の重職を担う五摂家の筆頭、関白太政大臣となって位人臣を極め、有名な「望月の歌」＝この世をば我世とぞ思う望月の欠けたることもなしとおもえば＝と詠った人物である。娘二人も皇后や妃として入内させて一条天皇と三条天皇の外叔父である。

この藤原家の嫡流である近衛家の陽名文庫に伝わる道長自筆の日記「御堂関白記・国宝」全14巻が今年1月に東京国立博物館で公開された。日記は何の為に書かれたか。子孫に伝えられ、麗しいかつての作法として珍重されたといい、貴族はみんな日記をつける習慣があった。

道長の日記の字体は、のびのびとした達筆で誤字、間違いが多いが、その人柄は闊達な陽性な気質の持ち主であったようだと学者の著書に書かれている。

誤字例の「於馬腸殿初調薬」、腸は場、薬は楽の間違いで、これは「馬場殿に於て調楽を初む」ということである。

この「宮廷のみやび展」と銘うった特別展には鎌倉時代に書写された源氏物語の伝本、いわゆる青表紙本が展示されていたが、源氏物語の式部自筆の原本、紫式部日記に書かれている清書したばかりの物語を道長が局に来て持ちさってしまった、という原本はやはり展示されておらず現存していないのであろう。道長自筆の日記が残されている以上、紫式部自筆の原本が残っているかと一縷の望みを抱いて、わざわざ上野の博物館に足をはこんだが残念であった。時あたかも今年は源氏物語千年紀にあたるという。じっと千年の昔に道長が書いた日記を見ていると、彼の声が聞こえてくる様な幻想の世界に陥るのであった。

蜃気楼

老夫婦の旅だより　疾駆する高砂族の少女

台湾には多くの観光名所があるが、台北の故宮博物院は白眉であって、世界四大博物館の一つといわれている。この観光には数日かける必要がある。

遥か東方の国から観光に訪れた老夫婦は、故宮博物院を見たあと足を伸ばし、タロコ峡谷におもむいた。峡谷の深さは気が遠くなる程である。全山が大理石に覆われているが、峡谷は地球の営みを表面に出していて、下流の方は普通の岩石、中流以上は大理石、更に上流は玉と変化している。

これはマグマに乗った岩盤が南から圧してきている為で、この圧力で岩石が長い間に玉に変化するのだとガイドから説明された。道理でタロコ観光の基地、花蓮の町には大きな玉の加工工場がある。

峡谷の最上流は台湾の山でも一番深い場所で、小さな博物館があり珍しい枯葉蝶や巨大なかぶと虫などが展示されている。ここの売店に十代半ばと見られる少女が居て店を手伝っている。少数民族の高砂族の少女である。小柄でとても可愛らしい。老夫婦は手振りを交えて、この少女から土産を買い求めた。間もなくして激しい爆音がするので見ると、あの可憐な少女がオートバイに跨がり、峡谷のカーブする山道をフルスピードで疾駆して下って行くのが見えた。忽ちのうちに視界から消え去ったが、その姿に、老夫婦は勇猛果敢な少数民族の片鱗を見た思いがしたのだった。＝投稿＝

歓迎します！皆様の投稿！

町会の広報紙「ふれあいのひろば」は、町会員の皆様の集う「広場」です。皆様、どうぞ投稿してください。但し、思想信条、宗教、プライバシーに係るものは受付けできません。投稿は左記へお寄せください。

上平間393　堤　秀夫
（町会・総務部長兼文化部長）